

■ハイドン／ヴァイオリン協奏曲八長調 Hob.VIIa:1

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）は1761年、29歳でエステルハージ侯爵家の副楽長になった。その就任承諾書には14条の契約条項があり、その一つに殿下の望む曲を作曲する義務とそれを第三者に提供することの禁止、また、他の人のために作曲することの禁止が記されている。65年には楽曲の管理がいろいろ加減だと怒られ、自ら草案目録を作成し始めた。八長調の協奏曲はこの目録に「ルイジのために作曲された」と記載されている。ルイジとはイタリア出身のヴァイオリニスト、ルイジ・トマシーニのことで、彼はハイドンより早く、1757年からエステルハージ侯爵家で雇われ、のちにコンサートマスターも務めた名手である。

この協奏曲はバロック時代の協奏曲の痕跡を残しつつ、古典派の協奏曲へと変化していく特徴も持っている。ちょうどバルトークがディヴェルティメントで用いた独奏楽器群と全合奏を対比するコンチェルト・グロッソの形態や、付点リズムの伴奏音型などが見られる。たとえば、第1楽章アレグロ・モデラートではオーケストラのシンフォニックな呈示部に続いて、独奏ヴァイオリンはその付点の多い楽想をそのままダブル・ストップで奏で、ドラマティックに登場する。リトルネロ形式と協奏風のソナタ形式が融合され、独奏がヴィルトゥオーシティを披露する。短い序奏で始まる第2楽章アダージョ・モルトは、この上なく優美な緩徐楽章。ピチカートで伴奏されるヴァイオリンの独奏は高音域で装飾的なメロディを奏でる。第3楽章プレストは協奏風ソナタ形式で、颯爽としたフィナーレである。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。